

平成 27 年度一橋大学法科大学院入学者選抜試験

## 小 論 文

・ 解答上の注意

1. 問題用紙は 8 枚、解答用紙は 1 枚（表・裏）、下書き用紙は 1 枚です。
2. 解答用紙に、一橋大学の受験番号を記入してください。氏名は絶対に記入しないでください。
3. 解答は横書きにしてください。
4. 解答用紙は、受験番号を記入する面が表になります。問 1 を表に、問 2 を裏に解答してください。解答用紙は、白紙である場合も含め、すべて提出してください。
5. 解答用紙の追加、交換はしません。
6. 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使わないでください。
7. 問題の内容についての質問には、応じません。
8. 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は、持ち帰ってください。

## 問題

[問題文] を読んで、問 1、問 2 に答えなさい。

問 1 下線部『アイデンティティに基づくマーケティングと消費とがアイデンティティの政治と密接に関連』してきたこととは、どのようなことか。問題文中の具体例を交えながら説明しなさい。(句読点も 1 字と数え、800 字以内とする。)

問 2 問題文で筆者が論じる「ラディカルな性の政治」の内容に言及しつつ、これに対するあなたの考えを述べなさい。(句読点も 1 字と数え、1,000 字以内とする。)

### [問題文]

2011 年の年末、日本在住のセクシュアル・マイノリティの中には NHK 紅白歌合戦を、というよりその 1 週間前に発表されたレディ・ガガの紅白出場を、通常よりほんのすこし期待をこめて待っていた人たちがいたかもしれない。もちろんガガの人気はセクシュアル・マイノリティに限定されたものではないとはいえ、ガガが早くからセクシュアル・マイノリティへのサポートを表明してきたことはよく知られているし、彼女はマドンナに匹敵するゲイ・アイコンでもある。何より、この年にリリースされて世界中で 800 万枚を越える売り上げを記録したシングル「ボーン・ディス・ウェイ」は、「セクシュアル・マイノリティをサポートする歌」であることを前面に押し出したものだったのだ。「ゲイだろうとストレート、バイだろうと／レズビアン、トランスジェンダーだろうと／あたしはちゃんと正しい方向にむかってるわ」と歌うこの曲の歌詞には、「ドラッグ」「クィーン」などのゲイ・カルチャーと結びつけられるわかりやすいキー・タームがいくつも投げ込まれ、PV ではゲイ・プライドや同性愛者の権利獲得運動のシンボルのひとつであるピンク・トライアングルが使われている。そんなゲイ・アイコンが、世界的なヒットとなったゲイ・アンセムを引きさげて紅白歌合戦に登場する——それはあきらかに例のないことであり、セクシュアル・マイノリティをとりまく性の政治が、少なくともアメリカ合衆国において、そしておそらくはアメリカのポップ・カルチャーを受容する文化圏においても、変わりつつあることをしめす出来事だった。

もちろん、実際にガガが「ボーン・ディス・ウェイ」を紅白で歌ったときにあきらかになったのは、どこかで何かが変わりつつあるにしても、日本のテレビにおけるセクシュアル・マイノリティ理解は以前とくらべてそれほど劇的に改善されているわけではない、ということでもあった。放送にあたって NHK は、「ゲイだろうとストレート、バイだろうと／レズビアン、トランスジェンダーだろうと (問題ではない)」という歌詞に「性的好みなんてどうでもいい」という日本語字幕をつけたのだ。これは、セクシュアリティは「好み (嗜好)」ではなく「オリエ

ンテーション（指向）」の問題だというゲイ／レズビアン・ポリティクスの基本的な主張に逆行するのみならず、セクシュアリティではなくジェンダー自認の問題である「トランスジェンダー」を完全に消去してしまうものでもあった。紅白歌合戦が日本のセクシュアル・マイノリティの地位や権利の向上の契機になると期待していたわけではなくても、この字幕のあまりに基本を外したお粗末さは、日本におけるセクシュアル・マイノリティをとりまく政治に関心をもつ視聴者を失望させるものだったと言える。

とはいえ、最初に述べたように、「ボーン・ディス・ウェイ」という曲とその爆発的なヒットは、アメリカ合衆国を中心とした「セクシュアル・マイノリティの運動 の／に対する 態度」の変化を象徴したのもでもあった。言うまでもなく、一面ではこれはポジティブな変化である。世界的なヒットを記録したポップ・ソングがジェンダーやセクシュアリティの多様性を称揚することも、もしかしたらそれと連動してセクシュアル・マイノリティへの差別や偏見が改善されることも、もちろん、望ましいことだろう。しかし、合衆国における性の政治のこのような変化には、ラディカルな性の政治をおしすすめるまさにその立場から、批判もまた向けられている。それどころか、現代のクィア理論とポリティクスとにおける最大の焦点のひとつは、まさしくこの変化に関係しているのである。

本論に入る前に、まず、クィア・ポリティクスが、そしてそれと密接に関連しながら誕生したクィア理論が、どのような背景と特徴をもっていたのか、それを簡単に確認しておきたい。

クィア・ポリティクスの発生をうながした最大の要因のひとつは、1980年代初頭からアメリカ合衆国においてその症例が報告されはじめた<sup>エイズ</sup>AIDSの流行である。当初 GRID（ゲイに関する免疫不全）と呼ばれ、ゲイ男性とむすびつけられたこの病は、同性愛嫌悪を利用すると同時に強化しつつ、ゲイ男性一般、そしてゲイ男性に限定されない AIDS 発症者への制度的な差別と排除とを悪化させていった。その中でうまれた AIDS アクティヴィズムの特徴のひとつに、人々の耳目をひくようなアクションを通じて政治的な可視性を高める戦略の採用がある。AIDS アクティヴィズムの強い影響をうけて誕生したクィア・アクティヴィズムもまた、劇場的とも評される視覚的パフォーマンスを、その特徴的な戦略とすることになった。非規範的なセクシュアリティやジェンダーへの差別や排除の気運が高まる中、この戦略はそのまま、既存の規範にしたがわない性や身体の正当性を臆面もなく主張し、それを認めない規範を公然と批判することを意味した。「私たちはここにいるし、私たちはクィアなのよ、それに慣れることね」というよく知られた標語に象徴されるように、クィア・アクティヴィズムは、いわば反抗的な開き直りの姿勢を、前面に打ち出したのである。

アクティヴィズムにおけるこの傾向はクィア理論と称されるようになる一連の学術研究にも見てとることができるが、そこで重要なのは、この時に中心的な役割を果たしたのがポスト構造主義の影響を強くうけた理論家だった点である。このため、性や身体に関する規範への批判や「あなたたちが好もうと好むまいと私たちはここにいる」という反抗的な開き直りの姿勢は、学術的な議論においては、まず、男性と女性、異性愛と同性愛といった二項対立的なカテゴリーに身体やアイデンティティを割りあてることそれ自体への批判として、焦点化されることに

なった。テレサ・ド・ラウレティスが述べたように、クィア理論は、「所与の頂 [……] を逸脱し、それらの限界を超えていく——あるいは少なくとも、それらを問題化する」ことをめざしたのである。したがって、「私たちはここにいる」という主張は、「あなたたち」とは明確に異なる集団としての「私たち」の存在の確認ではなく、「私たち」を異分子として排除しようとする「あなたたち」の内部に「私たち」はすでに存在しており、両者を峻別する本質的で不変の差異が都合よく存在するわけではない、という暴露のかたちをとった。何らかの本質に支えられた安定したアイデンティティという理解とそれに基づいて編成された政治とに対する異議申し立ては、90年代初頭のクィア理論の特徴のひとつだったのだ。

とはいえ、アイデンティティ政治批判は学術研究に特有の傾向ではない。AIDS アクティヴィズムは、それまでしばしば別の活動に従事していたレズビアンとゲイ男性との協力を要請すると同時に、IV ドラッグユーザー<sup>ii</sup>やセックスワーカーなど、社会的に周縁化された異性愛者のPWA (Person With AIDS)や感染者にもかかわるものだった。ここから生まれたクィア・アクティヴィズムがアイデンティティ政治に批判的なのは、この意味では当然の成り行きであった。さらに、規範に対する反抗的な開き直りを特徴とし、それらに拘束されない存在の正当性を主張するクィア・アクティヴィズムの姿勢は、ポスト構造主義的なクィア理論のアイデンティティ批判とも親和性をもつものだった。規範からはずれた存在の正当性の主張は、既存のアイデンティティのカテゴリーに規定されない「クィアな私」の正当性の主張へと容易に翻訳されうるものだったし、クィア理論によるアイデンティティ批判はこの理論的根拠として参照されもしたのである。言うまでもなく、精神分析理論やデリダの脱構築理論などに影響されたクィア理論は、アイデンティティのカテゴリーのみならず、規範に拘束されない「私」という発想それ自体への懐疑と批判とを、その出発点としている。したがってそれは本来、「私」の正当性の主張とは容易には相いれないはずであった。しかし、AIDS アクティヴィズムが対抗的政治運動から「主流化」へとその重点をうつしたのをなぞるように、とりわけ90年代中盤以降、「クィア」はアメリカ合衆国のポップ・カルチャーの主流へと徐々に組み込まれはじめ、それにつれて「クィア的な態度」は社会的拘束をまぬがれた自由な「私」の称揚とますます結びつけられていくことになる。

レディ・ガガの「ボーン・ディス・ウェイ」は、ポップ・カルチャーにおける「クィア的な態度」のこのような主流化傾向が行き着いたひとつの頂点とも言える。大仰な劇場性と奇抜な官能性とが人目をひくPVに反して、この曲の歌詞は、既存の社会秩序への批判でも攻撃でもなく、むしろ応援歌と形容する以外にないような、「健全」でポジティブでしかしパーソナルなメッセージを伝える——「後悔のかげに隠れないで／自分を愛せばそれで大丈夫／あたしはちゃんと正しい方向にむかってる／こういう風に生まれついたんだもの」。ガガのメッセージがクィア・アクティヴィズムの戦闘的な社会批判やポスト構造主義的なクィア理論のアイデンティティ批判からいかに離れているのかは、人気ドラマ『glee／グリー』（2009年ー、FOX）のガガをフィーチャーしたエピソードを見れば理解しやすい。第1シーズン20話（2010年）、「劇場性」と題されたこのエピソードの終盤で、高校のグリー部に所属するゲイのカートはアメフ

ト部の生徒 2 人に取り囲まれ、ガガの曲のパフォーマンス用の奇抜な舞台衣装をなじられて、こう言い返す——「殴りたいなら殴ればいい。でも僕は絶対に変わらないよ。僕はみんなと違っていることを誇りに思っている。それが僕の一番良いところなのだから」。そこに同じく奇抜な衣装をまとったグリー部の仲間が応援にかけつけてアメフト部の 2 人を撃退し、グリー部の一同は自分たちが「奇人 (フリークス)」であるとしても「みんな一緒に奇人だよ」と確認する。このシーンで強調されるのは、ガガの「ボーン・ディス・ウェイ」で見られるのときわめて類似した「クィア的な態度」——奇抜な差異の公然たる主張——である。そして「ボーン・ディス・ウェイ」の時と同様、この奇抜な「劇場性」もまた、制度に対する批判に向かうより、「私」の——さらには「私を含むみんな」の——エンパワーメントへと焦点化していくのだ。

たしかに、「私は変わらないし、このままでいい」という主張はマイノリティのエンパワーメントとして力もちうるし、そのエンパワーメントの必要な文脈も存在する。しかし同時に、この主張がクィア・アクティヴィズムやクィア理論の姿勢を部分的に受けつぎつつ、「私たち」と「あなたたち」とを峻別する既存の規範に対する批判的側面を大きく後退させ、「他の人たちと異なる私 (たち)」のゆるぎない境界線を確認し主張する、いわば脱政治化されたアイデンティティ・ポリティクスの性質を強めていることにも、注意をはらう必要があるだろう。脱政治化された「私」のエンパワーメントへとむかうこの傾向は、ラディカルな性の政治に何をもちこたらし、そこから何を奪っているのだろうか。

この点を考察するためには、90 年代から 2000 年代にかけてのアメリカ合衆国における「クィア」の主流化について、あらためて確認しておかなくてはならない。

すでに述べたように、90 年代中盤以降、「クィア的なもの」は合衆国のポップ・カルチャーにおける可視性を少しずつ獲得していく。商業的な要請に応じた「クィア」がどのようなかたちで可視化されるのか。それを象徴するのが、98 年に放送が開始されて世界的なヒットとなった『セックス・アンド・ザ・シティ』(1998—2004 年、HBO) と、メイクオーバー番組としてこれも人気の高かった『クィア・アイ (Queer Eye for the Straight Guy)』(2003—07 年、Bravo) という、ふたつのテレビ番組である。4 人のシングル女性の友情と恋愛とを描く『セックス・アンド・ザ・シティ』は第 1 シーズンから主人公の「ゲイの親友」を登場させる。「ゲイの親友」は主人公の愚痴の良い聞き役、恋愛の相談役であり、ファッションへの情熱を共有する相手でもある。ここでの「ゲイの親友」は、自分の欲望に忠実に生きる女性のファッションナブルさや「進歩性」を保障するアクセサリーであり、主人公に脅威を与えることも、居心地の悪い思いをさせることもない。異性愛主義者への脅威でもその批判者でもなく、むしろ異性愛者にとって安全で役に立つ「クィア」というこの表象は、『クィア・アイ』ではさらにいっそう徹底したものになる。ファッションナブルで生活を楽しむ術を知っているゲイ男性、というステレオタイプを利用したこの番組では、「ファブ・ファイブ」と呼ばれる 5 人のゲイ男性が異性愛者の男性にファッションや食事、インテリアなどについてのアドバイスをあたえ、メイクオーバーを手伝うことになる。番組のスターはたしかにレギュラーであるファブ・ファイブであるものの、彼らがあくまでも異性愛者の生活向上の補助役という地位にとどめられるのは『セックス・ア

ンド・ザ・シティ』と同じである。ただし、これらの番組に関して注目すべきなのは、多数派に有益な技能をもつ便利な少数派として「クィア」が消費されているという点だけではない。本稿の議論にとってそれと同じくらい、あるいはそれ以上に重要なのは、彼らがいわば消費の達人として表象されているという点である。「ゲイの親友」にせよ「ファブ・ファイブ」にせよ、その（異性愛者にとっての）真価は、ファッションやインテリア、娯楽などをいかにスタイリッシュに消費し、消費を通じてスタイリッシュになるのか、そのお手本を見せる時にこそ発揮される。合衆国の主流ポップ・カルチャーにおける「クィア」は、何よりもまず、消費文化をもっとも良く体現し、それをもっともたくみに享受する存在なのだ。

このような「消費する／される〈クィア〉」に見られる合衆国の消費主義と性の政治との相互利用関係は、実のところ、クィア・アクティヴィズム以前にさかのぼる。アレクサンドラ・チャシンは、「1990年代には、個人のアイデンティティを形成しアイデンティティ集団へ参入する多くのゲイ・ピープルにとって、市場メカニズムはおそらくもっとも利用しやすく、もっとも効果的な手段となった」としつつも、これを90年代特殊の現象としては捉えず、70年代のゲイ権利運動の時代から「アイデンティティに基づくマーケティングと消費とがアイデンティティの政治と密接に関連」してきたことを指摘する。同性愛者のアイデンティティとコミュニティの形成を可能にした背景として、ジョン・デミリオが資本主義の発展にともなう労働と家族形態との変遷をあげたことは、よく知られている。これに対してチャシンは、とりわけ1970年代以降のアクティヴィズムに焦点を合わせながら、ゲイ・アイデンティティやそれに基づくリベラルな権利運動と市場との、より直接的な関係を見いだす。彼女が分析対象としてとりあげるのは、ゲイ権利運動が全国的な組織化を達成するにあたって大きな役割を果たしたゲイ／レズビアン・プレス、それらのプレスを通じてうみだされるニッチとしてのゲイ市場、まさしくそのニッチ市場の力によって政治的要求をおこなうボイコット運動である。そして、そのいずれにおいても、リベラルなゲイ権利運動の基盤である政治的アイデンティティは、ゲイ市場における消費者としてのアイデンティティをうみだすと同時に、それによって支えられてもきたのだ。市場の力を利用したこのようなアイデンティティの政治は、必要な資金と社会的承認とをアクティヴィズムにもたらし、個人のエンパワーメントと運動の拡大とに貢献してきた。しかし他方で、個々人の政治的アイデンティティが購買行動をつうじて表明される運動は経済的な不正義を見逃しがちになる、とチャシンは批判する。ゲイ市場という差異を承認するかに見えるこの政治・経済制度は実際には「同質性を促進している」のであり、消費者としてのこの同質性にうまく合致しない人々の政治的要求は表明されにくくなってしまふのだ。

チャシンはこれをとりわけアイデンティティ政治の問題として位置づけるのだが、かといってアイデンティティ政治批判の側面をもつクィア・アクティヴィズムを全面的に称揚しているわけではない。「性の解放——ジェンダーや性的志向のカテゴリーからの解放——を信条とするいかなるアイデンティティとの同盟にも喜んで応じる」というクィアなあり方は、アイデンティティ政治批判として機能する半面、人種やジェンダーなどの差異を周縁化してしまう、と彼女は指摘するのだ。しかし、ローズマリー・ヘネシーにとっては、まさにこの「いかなるアイ

デンティティとの同盟にも喜んで応じる」態度こそ、クィア理論やアクティヴィズムがそれ以前のリベラルなアイデンティティの政治から引きついだ欠点である。ヘネシーは、文化的アイデンティティや記号の意味作用の問題を優先するカルチュラル・スタディーズや文化的唯物論が資本と階級の問題を棚上げにしてきたと論じ、この潮流の中にクィア理論を位置づける。ポスト構造主義に影響を受けたクィア理論が「搾取という資本主義の根本的な問題を抹消」し「物質性という概念を象徴的プロセスだけに基づかせている」というヘネシーの批判は、逆にクィア理論が考察しようとしてきた「物質性」の概念をあまりに早急に退けてしまう危険性をもつ。しかし同時に、「クィア」のポップ・カルチャーにおける主流化の過程を考えるなら、この批判が重大な問題を提起していることもまた、見過ごされるべきではない。とりわけ、アイデンティティや意味作用の偶発性や暫定性がもたらす変容への「ひらかれ」を強調するあまり、クィア理論が「潜在的にはどのような社会的関係をも——搾取的な関係性すらも——承認してしまう」というヘネシーの指摘は、固定した本質的アイデンティティという概念の批判をその出発点にもちいわば変容可能性に特徴づけられたクィア理論／アクティヴィズムがいかに同時代の市場の要請と呼応しているのか、それを考えるにあたってきわめて重要なものとなる。

アイデンティティの固定性へのクィアな批判と市場の関係にチャシンやヘネシーとは異なる方向から光をあてたのが、エミリー・マーティンである。マーティンは、アメリカ合衆国における身体のイメージが 1970 年代前後を境に変化し、状況の変化に積極的に対応して問題解決を図る、柔軟で適応力のある身体というイメージが浸透してきた、という点に着目する。この議論で興味深いのは、免疫学やポピュラー・サイエンス、家庭医学などにおいて柔軟で適応力のある身体のイメージが広まっていく時期が、後期資本主義下での「柔軟な専門化」と呼ばれる産業と労働の再編成の時期と重なる、という指摘である。大量生産が流行遅れになり、製品のリモデリングのペースが加速すると同時に、高度に専門化されたニッチ市場への柔軟な対応が要請される。それに従って労働のあり方も、必要とされる技能を必要とされる時と場において提供し、柔軟に提供先を変えるようなものへと、変更を迫られていった。もちろん裏を返せばこれは、適切な柔軟性を発揮できない労働者や企業はその生存自体を脅かされるということでもある。ネオリベラリズムという用語は使わないものの、彼女はあきらかにネオリベラル体制下での労働の問題を語っているのだ。しかしこの危険性にもかかわらず、柔軟性それ自体を望ましいとする発想はひろく社会に浸透しつつある、とマーティンは指摘する。そして、このような柔軟性の理想への期待が観察される場として、免疫学、労働と市場、公的組織などと並んで、心理学における柔軟な自己や流動的なアイデンティティにかかわる議論をあげるのである。

ここで私たちは、70 年代以降のゲイ／レズビアン・アイデンティティの形成が市場と密接にかかわっていたというチャシンの指摘や、免疫機能が生命を左右しかねない重要な問題となった 80 年代の AIDS の流行がクィア理論とアクティヴィズムとの背景にあるという歴史を、思い出す必要がある。クィアなアイデンティティ批判とアイデンティティに基づくリベラルな権利運動との間に連続性を見だし、そのどちらもが資本主義体制内部での——市場や労働のあ

り方への批判を欠いた——平等の主張であるとするヘネシーの主張は、この時、より説得力をもつ。だとすればポスト構造主義的なアイデンティティ批判から「私はこのままでいい」と主張する消費のエキスパートへという推移は、それほど無理のないものだったのかもしれないのだ。もちろん、前者の重要な特徴であった規範への批判が後者において目に見えて後退していることは、忘れられるべきではない。そうであっても、後者において露骨に前景化した市場や消費主義との共存関係が前者にすでに内包されていた可能性は、否定できないだろう。

しかし、言うまでもないことだが、市場や消費主義との柔軟な共存は、「クィア」に安定した特権的な地位を与えるものではない。マーティンによれば、労働市場における柔軟性にはふたつの側面が存在する。一方で企業は労働力を必要に応じて柔軟に雇い入れたり解雇したりすることで、状況の変化に対応し存続をはかろうとする。他方で労働者には雇用や解雇の要請を柔軟に受け入れることが要請される。ロバート・マクルーアはこの指摘を援用しつつ、異性愛主義とクィアの間にも同様の不均等が存在する、と主張する。異性愛主義が必要に応じてクィアな存在を柔軟に受け入れつつ自らの維持をはかるのに対し、クィアな存在は、異性愛主義の要請に応じて異性愛主義を損なわないかたちでみずからを提供するようにと求められるのだ。安全で役に立つ、現状への批判者ではなく消費のエキスパートであるような「クィア」が、このような非対称な柔軟性の要請の中でうみだされてきたものであることは、確認しておかなくてはならない。とはいえ、マーティンが指摘するように、高度に柔軟な労働者だけが生きのびられるような労働市場では、人種や民族、ジェンダーやセクシュアリティ、経済階層や心身の健康などにかかわる理由で柔軟性の獲得に役立つリソースにアクセスしにくい労働者は、いっそう不安定な状況におかれ、その生存をさらに脅かされることになる。だとすればそれと同様、消費のエキスパートとしての「クィア」が「私はこのままでいい」というパーソナルなエンパワーメントのもとに柔軟に主流化をはかるとき、より消費にアクセスしにくい人々はクィア・ポリティクスの周縁へと押しやられてしまうことにならないだろうか。

アメリカ合衆国における性の政治がまさしくこのような問題をうみだしつつあることに鋭い警鐘をならしたのが、リサ・ドゥガンである。1990年代に入ってネオリベラリズムがその力を強めるにつれ、ラディカルな性の政治は社会的なリソースと権利とのより平等な再分配の追求をあきらめ、既存の不平等な体制内部での権利の要求へとその射程をせばめてしまった、とドゥガンは批判する。彼女によれば、進歩的左派勢力がアイデンティティの政治か普遍性の政治なのか、経済なのか文化なのか、という議論を続けている間に、ネオリベラリズムは「公的な生や、民主的討論、そして文化的表現の領域を縮小しつつきて」きたのである。この観点からクィア・ポリティクスに関してドゥガンが注目するのが、彼女が「新しいホモノーマティヴィティ」と呼ぶ、ネオリベラルなセクシュアル・マイノリティの政治である。新しいホモノーマティヴィティとは、「支配的な異性愛規範の前提や秩序には意義をとらえず、それらを支持し、維持する。それと同時に、ゲイ有権者層の解散の可能性、そして家庭と消費とにつなぎとめられた、私的で脱政治化されたゲイ・カルチャーの可能性を、約束するのである」。これは一種のゲイ・アイデンティティ・ポリティクスではあるものの、たとえば70年代以降のゲイ権利運動

とくらべても、その「政治」がかかわる公的な領域ははるかにせまく設定されている。セクシュアリティを公的な問題として政治化してきたこれまでのアクティビズムに対し、新しいホモノーマティヴィティが目指すのは家庭に代表される私的領域における自由であり、それはとりわけ消費や経済活動の自由と結びつけられている。ただしこれは、新しいホモノーマティヴィティが政治運動も権利の要求もいっさいおこなわない、ということではない。同性婚に象徴される家庭というプライベートな空間へのアクセス、自由な市場へのアクセス、そして同性愛者の軍隊加入に象徴される愛国心へのアクセスについては、その権利の平等が主張されるのである。つまり、この文脈において、「〈平等〉は、保守化に貢献するいくつかの制度への、限られた、形式的なアクセスへと変わる。〈自由〉は営利活動と市民社会とにおける不寛容とすさまじい不平等とを免罪するものになる。〈プライバシーの権利〉は家庭に閉じ込められ、そして民主的な政治はそれ自体が避けるべきものとなってしまう」。ここでの性の政治は、ネオリベラルな体制のもたらす不安定さによって生存を脅かされる人々から切り離されるばかりでなく、家庭やセクシュアリティなどの「私的」とされてきた領域にかかわる問題の政治化という歴史的成果すらも、失おうとしているのである。

【【問題文】は、清水晶子『「ちゃんと正しい方向にむかっている」——クィア・ポリティクスの現在』（三浦玲一・早坂静編著『ジェンダーと「自由」』（彩流社、2013年）所収）からの抜粋である。原文の一部を省略し、表記を変更した箇所がある。】

---

i アンセム anthem. 祝歌、頌歌。

ii IV ドラッグユーザー intravenous drug user. 静注薬物常用者（静脈注射により薬物を常用する者）。